**大室　弘子 （おおむろ・ひろこ）**

**１、プロフィール**

横山武夫師の教えを忠実に守り、心に沁みる、写実の歌を生涯作り続けた。

＜生没＞

1931（昭和６）年７月24日～2005（平成17）年６月８日

＜代表作＞

『桜の絵時計』

＜青森との関わり＞

生地は、青森市、大学卒業後、弘前市に居住。

**２、作家解説**

大室弘子は、昭和６年７月24日青森市生まれ。大学卒業後、弘前市に在住。中学校教員の傍ら60年間短歌を作り続ける。横山武夫に師事。長年、歌誌『アスナロ』で活躍。アスナロは、子規、左千夫、赤彦、藤沢古実、横山武夫と系統の連なる短歌の本道でもある。本人も根本に不動のものを持っていて端正な歌が多い。

・山鳩の鳴く声もわびし土におく吾子の御骨のかすかなる音も

・阿弥陀尼の御手に引かれて行く吾子の姿思ひて合掌をする

・笹の葉に海風吹きて鳴り止まず吾子の眠れるこの北の地は

歌集「桜の絵時計」の巻頭の３首を録した。沈痛な慟哭の声である。味わいの濃い生々とした感情を聴くことができる。

・休みなく作歌続けよと書きたまふはがきの文字もありがたきかな

・限りある命のこと説きあかすこの生徒らにはほど遠きこと

・無給与の休職となるもなほ職にとどまりたく思ふ業の如きか

大室さんは慈愛に満ちた女教師だった。諦念にもかよう静かな心境の１連である。

・病名のいくつともなくかさなれば身のまはりをば整へおきたし

・師の歌碑の新聞記事を切りぬきて尋ねゆかむ日を病みゐて待てり

病気と闘いながら熱心に作家活動を続けた。横山武夫の指導を受け正道を学び、温順で確かな歌風を確立した。多年積み上げてきた力量を基礎として優れた歌を残している。自然流露の中にも驚くべき程の鋭敏と工夫の歌を作り続けた。

・たたなはる四方の山並日に照りて蝉鳴き止まぬ樹海見おろす

・山上に霧立ちのぼり四方の山白夜のごとき底に消え行く

・ただ１人のわが歌の師と仰ぎ来ぬ今日向ふ歌碑に涙さしぐみ

**３、資料紹介**

〇『桜の絵時計』

図書

2006(平成18)年６月８日

209mm×145mm

昭和22年～平成17年６月までの歌誌「アスナロ」「群山」の掲載誌より選出した遺歌集。